

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	堀 建治
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院 教育発達科学研究科博士課程 後期課程 教育科学専攻 単位取得満期退学	修士 (教育)	幼児教育学・保育学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

本学部がめざす保育者像や学科の特性をふまえ、専門的（学問的）知識に触れながら、保育・幼児教育における具体的な事例等をもとに人の発達や子ども理解を深め、とくに「子どもの視点」から保育者の役割や援助、環境構成等を考え、意味を深く理解し主体的に行動できるようになることを理念として教育活動を行っている。

【目標】

本学の建学の精神を具現化していくことが教員の責務である。「信頼」されるということは他者から「あてにされる」ということであり、教員自らが「あてにされる」姿をみせなければならない。コロナの終息が見られるなか、対面授業ではマスクを外し、姿をみせることへの抵抗や困難さが予測される。本年度も当初から対面での教育実施の方針が出されているなかで、教育者・保育者という指導する立場に就く学生に対して、その自覚を促し続けることが第一と考える。さらに学生の持ち味や思いを引き出すことを念頭に教育活動を行う。そのために自分が学生のために何ができるのか、その点を見極めつつ教育実践を図る。

【方針】

- ・「信頼」という観点から、学生との対話を重視し、学生の思いに耳を傾けていく。
- ・授業は「できる」ことのみを追求するのではなく、「わかる」ことを念頭に進めていく。
- ・上記の方法として、対話を主軸としつつ、振り返りシートやリアクションペーパーを用いての状況把握に努める。
- ・理論面に加えて、実践面での強化を図る観点から、積極的に「遊び」体験を取り入れる。
- ・さまざまな「遊び」体験を重ねることで、学生自身の充実感や満足感を高める。
- ・同時に「遊び」の実践者としての専門性や技量の向上をめざす。

【計画（方法）】

上述の教育理念・方針を達成するため、1年次前期学部必修科目である「保育原理」では授業開始時にミニッツテストを導入して、前回授業での学びに対する理解や達成度を確認しつつ、授業終了時にはリアクションシートで本時の不明確な部分や質問を書くことで意識づけを行う。また授業の中間時と最終時に進捗確認試験を実施し、自身の理解度がどの程度にあるかを確認できる機会を設けている。2年次前期の保育士必修科目「保育実習事前指導ⅠA」では、実習に向けての心がまえをはじめとして、記録のまとめ方や指導案作成、さらには保育教材の作成と学外実習に向けて多岐にわたっての様々な準備を行う。その際、課題提出の双方向のやりとりを通じて、学生の理解度を把握しつつ、個別に指導を行う。さらに2年次後期の「保育実習指導ⅠA」では実習直前に必要となる書類整備や実習に向けての準備、実習終了後には自己評価の作成や実習成果の発表をすることにより、学生自身の課題を浮き彫りにしつつ、次回の各種実習に向け

ての改善を図る。

○担当科目

(前期)

サービス・ラーニング実習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、保育原理、保育実習事前指導ⅠA、幼児と言葉、幼児と人間関係、幼児理解の理論と方法

(後期)

サービス・ラーニング実習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究、保育実習ⅠA、保育実習Ⅱ、保育実習Ⅱ、事前事後指導、保育実習指導ⅠA、保育実践演習、保育内容（人間関係）

○教育方法の実践

新型コロナウイルス感染に配慮しつつ対面にて実施した。感染防止の観点から学生同士のディスカッションや作業など、前年度に比べて多く取り入れた。その結果、学生相互がかかわる機会は増えたものの、グループワークへの取り組みが難しいと思われる学生も散見された。学生の発表力やコミュニケーション力向上についてはコロナ下の影響を考慮した支援のあり方への課題が残る。

○作成した教科書・教材

永渕泰一郎編・堀建治他『新・保育内容「環境」 ラーニング・ストーリーで綴る学びの記録』「5章 乳幼児の生物・自然との関わり」2023年、教育情報出版、p.44-50

○自己評価

対面授業では双方向での授業展開を心がけた。前記のとおり学生の中には友人とのコミュニケーションについて困難を抱えている様子が見られた。その点については今後の課題としたい。授業の理解度についてはミニッツペーパーなどで把握に努めることができた。学修内容の定着を図る点では客観性に劣るところもあり、さらなる評価法を検討したい。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

1. 「楽しさ」に関する研究 — 「手遊び」を中心として —
2. ドイツにおける保育内容の研究

○目標・計画

【目標】

研究課題 1

本研究はこれまでも継続的に行ってきており、10年弱の時間を費やしている。本年度も「楽しさ」とは何かを解明するとともに、分析方法の確立をめざす。

研究課題 2

2018年にドイツ視察以降、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、今に至るまで現地調査ができていないなか、現地調査に向けての準備に充てる。

【計画】

研究課題 1

本年度はコロナの感染状況の推移を判断しつつ、保育者や子どもの「手遊び」場面を撮影し、逐語記録としての分析から「楽しさ」を検討することを予定している。

研究課題 2

本年度も昨年度同様、現地での調査が厳しい中、保育の環境構成の在り方や保育方法など、文献等の資料収集を含めて検討する。

○2016 年 4 月から 2024 年 3 月の研究実績（特許等含む）

（著書）

- ・伊藤潔志・堀建治他『哲学的な考えをいかす 新・保育原理－保育の未来を考える－』「6 章 3 節 3 歳児以上の保育を考える」2024 年、教育情報出版、p. 126-131
- ・永渕泰一郎編・堀建治他『新・保育内容「環境」 ラーニング・ストーリーで綴る学びの記録』「5 章 乳幼児の生物・自然との関わり」2023 年、教育情報出版、p. 44-50
- ・高内正子監修、上中修・堀建治他『保育実践に生かす保育内容「環境」』「3 章 4 節 保育者との関係性の発達、6 章 6 節 地域の文化にかかわる」2021 年、教育情報出版、p. 50-51, 92-93
- ・吉見昌弘・斎藤裕・堀建治他『はじめて学ぶ保育原理 新版』「第 3 章保育所保育指針における保育の基本」2021 年、北大路書房、pp. 49-63
- ・名須川知子・大方美香・立花直樹・堀建治他『MINERNA はじめて学ぶ保育シリーズ 11 施設実習』「第 2 章 実習の現場 レッスン 10 児童厚生施設およびその他の施設・事業所での実習 第 3 章 施設実習の実際 レッスン 11 施設実習の一日（11 児童厚生施設等）、レッスン 12 施設実習での体験と学び（11 児童厚生施設等）」2019 年、ミネルヴァ書房、pp. 19-30
- ・安田誠人・立花直樹・堀建治他『保育者の協働性を高める子ども家庭支援・子育て支援 「子ども家庭支援論」「子ども家庭支援の心理学」「子育て支援」を学ぶ』「第 2 編 子ども家庭支援 第 II 部 子ども家庭支援における詳説 第 9 章 子ども家庭支援における計画と環境」2019 年、晃洋書房、pp. 109-115
- ・津金美智子・小野隆・堀建治他『新・保育実践を支える 健康「5 章 2 節 園での安全指導」2018 年、福村出版、pp. 137-146
- ・谷田貝公昭・高橋弥生・堀建治他『新版 実践保育内容シリーズ① 健康』「第 2 章 領域「健康」とは」2018 年、一藝社、pp. 21-34
- ・春日晃章、中野貴博・堀建治他『新時代の保育双書 保育内容健康 第 2 版』「第 7 章 安全管理と安全教育」2018 年、榊みらい、pp. 138-142
- ・吉見昌弘・斎藤裕・堀建治他『はじめて学ぶ保育原理』「第 3 章保育所保育指針における保育の基本」2017 年、北大路書房、pp. 43-55
- ・安田誠人・立花直樹・堀建治他『保育実践を深める相談援助・相談支援』「第 2 編 保育相談支援 第 I 部 保育相談支援の趣旨 第 1 章 子どもの最善の利益と福祉の遵守」2017 年、晃洋書房、pp. 119-125
- ・咲間マリ子・堀建治他『コンパス保育内容総論』「第 12 章保育所・幼稚園・認定こども園における小学校との連携」2016 年、建帛社、pp. 95-102

（学術論文）

- ・白井克尚・柿原聖治・鈴木順子・堀建治・堀篤実「保幼小接続・連携を担う保育士と教員養成の実践－教育学部・総合演習における森林環境教育を目指したプロジェクト型学習を通じて－」『東邦学誌』第 52 巻 1 号、2023 年、pp. 47-63
- ・堀建治・松本亜香里・小杉裕子「保育者養成テキストからみる「楽しさ」に関する研究－保育教材としての「手遊び」を中心に－」『ユマニテク短期大学研究紀要』第 3 号、2020 年、pp. 12-

- ・松本亜香里・堀建治・渡邊明宏「ゼミナールにおける学生の主体性と学び合い ―保育教材作成および教材研究の取り組みから―」『三重幼児教育文化研究会 幼児教育文化研究』第5号、2020年、pp. 25-35
- ・堀建治「保育環境のあり方に関する一考察 ―ドイツにおける園庭の事例を中心として―」『三重幼児教育文化研究会 幼児教育文化研究』第5号、2020年、pp. 17-23
- ・堀建治「新「幼稚園教育要領」における領域「環境」に関する研究 ―教材研究のあり方を中心に―」『ユマニテク短期大学研究紀要』創刊号、2018年、pp. 12-17
- ・堀建治・松本亜香里「「楽しさ」に関する基礎的研究 ―「手遊び」をてがかりとして―」『三重幼児教育文化研究会 幼児教育文化研究』第3号、2018年、pp. 19-26
- ・堀建治「就学前施設と小学校との接続・連携のあり方に関する実践的研究」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部 教育実践研究』第2巻、2017年、pp. 121-128
- ・堀建治・丸山あけみ「相談援助としてのスーパービジョンに関する研究-児童養護施設を中心として-」大橋学園紀要第3号、2016年、pp. 97-102
- ・堀建治・松本亜香里「幼稚園教育要領における領域「表現」に関する研究（その1）―「造形」を中心として―」大橋学園紀要第3号、2016年、pp. 34-38
- ・堀建治「保育内容における「領域」に関する研究 ―「領域」の意義と小学校との接続を中心に―」『三重幼児教育文化研究会 幼児教育文化研究』創刊号、2016年、pp. 102-106
- ・堀建治「「認定こども園」の課題と今後の動向」『三重幼児教育文化研究会 幼児教育文化研究』創刊号、2016年、pp. 107-112

（学会発表）

- ・堀建治・松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その12）」（『日本保育学会第76回大会発表要旨集』2023年5月14日、熊本学園大学）
- ・白井克尚・柿原聖治・鈴木順子・堀建治・堀篤実「幼小接続を見据えた森林環境教育を担う教員の養成 ―教育学部総合演習におけるフィールドワークを通じて―」（「初等教育カリキュラム学会」2023年1月8日、広島大学）
- ・堀建治、松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その11）」（『日本保育学会第75回大会発表要旨集』2022年5月14日、聖徳大学）
- ・堀建治、松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その10）―新型コロナウイルス下における「手遊び」の実態を中心に―」（『日本保育学会第74回大会発表要旨集』2021年5月15日、富山大学）
- ・堀建治、松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その9） ―手遊びをてがかりとして」（『日本保育学会第73回大会発表要旨集』2020年5月17日、奈良教育大学）
- ・堀建治、松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その8） ―手遊びをてがかりとして」（『日本保育学会第72回大会発表要旨集』2019年5月4日、大妻女子大学）
- ・堀建治、松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その7） ―手遊びをてがかりとして」（『日本保育学会第71回大会発表要旨集』2018年5月12日、宮城学院女子大学）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

特になし

○所属学会

日本保育学会、日本乳幼児教育学会、日本保育者養成教育学会、
日本レジャー・レクリエーション学会、日本体育・スポーツ・健康学会

○自己評価

研究に関して逐語化に関する客観的評価を試みたが、芳しい成果を上げることができなかった。
次年度以降はさらに分析手法を確立しつつ、「楽しさ」の解明に向けて鋭意努力を重ねていきたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を中核として、自分自身が「信頼」される人物になるべく、与えられた職務に対して真摯かつ誠実な態度で臨む。

【計画】

本年度から学部長補佐に補職されたことにより、学部及び本学の運営に関してある程度の責任が生ずる。全学委員会として、本年度は昨年同様の教職支援センター運営委員会、地域・産学連携センター運営委員会に所属する。自分に与えられた職責を全うすべく努力をする。学部内では学部長補佐としての職務分掌も加わり、学部長を支えつつ、円滑な学部運営に主体的かつ積極的に参画していく

○学内委員等

学部長補佐、大学協議会、自己点検・評価実施部会、地域・産学連携センター運営委員会、教職支援センター運営委員会、幼小教職課程・保育士養成部会

○自己評価

本年度から学部長補佐として学部外の教職員の方々との交流の機会が増えてきているものの、不慣れなところもあり、多くの方々に支えられながら業務遂行ができた。2025年度の学部再編に向け、様々な準備が予定されるが、本年度の反省を生かしてより積極的に運営に参画できるよう、心がけていきたい。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

専門分野を生かしつつ、本学のさらなるブランドイメージ向上や社会的認知を意識し、自身の専門分野を生かした社会貢献をめざす。

【計画】

本年度は以下の公的機関から依頼を受けている。

- ① 亀山市教育委員会家庭支援講座講師
- ② 社会福祉法人立田南福祉会苦情解決第三者委員
- ③ 保育士試験実技委員（愛知県内試験委員の取りまとめ役として幹事委員を委嘱）

○学会活動等

特になし

○地域連携・社会貢献等

計画通り、円滑に取り組むことができた。

○自己評価

社会的貢献は大学における重要な役割であるため、今後とも業務に支障のない範囲で積極的に参画していきたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自身に掲げたクレドを大切にしつつ、何ごとにも謙虚かつ積極的に職務に邁進していきたい。

VI 総括

講義や学内業務について、新たに加わったとこともあり戸惑いもありつつ、学内の関係各位に支えながらも無事に遂行できたのではないかと評価している。ただし、項目ごとに課題はあり、改善を要する点が多いことも見過ごすことはできない。毎回、同じようなことになるが、評価は自分自身がすべきものではなく、あくまでも他人が行うものである。「自己評価」という枠のなかで無事に遂行できたとしても、自己満足にとどまっていたら意味をなさない。評価される本人を含めて、誰からみてもその評価が揺らぐことがないよう、心がけていきたい。

以 上